



Title	「平家物語」の構成：覚一本巻12を通して
Author(s)	美濃部, 重克
Citation	語文. 1989, 52, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68793
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「平家物語」の構成

——覚一本巻十二を通して——

美濃部 重 克

(一)

史書的な性質と物語り的な結構とを備えた「平家物語」の作品としての特質を、部分においてではなくて、全体の構成の上において把握しておくために、巻十二の構想について考えてみたいと思つてゐる。ただ私の関心は「平家物語」の古態を推断し、それによつて巻十二の原構成を炙り出すといった方向には向かわない。諸本の比較検討の作業はいちど後退させて、ひとつの伝本に限って——ここでは覚一本に限定して——その構想について考える。こうした問題を論じるためには考察は多岐に互らねばならないだろう。小稿ではその余裕はないので、巻頭の「大地震」および巻末の「六代被斬」の構想面での意味と作品全体の構成における位置を検討することに限るが、その問題を論じることとする。

(二)

巻十二の巻頭の章段は諸本の間にも異同があり、それがそれぞれの伝本の性質を如実に反映しているように思われる。覚一本が巻頭に

「大地震」を配したことに、どのような構成上の、ないし構想上の意図があったのか。平宗盛、ついで重盛の処分を語ることで巻十一を終わり、巻十二の巻頭を「平家皆亡び果てて西国も静まりぬ。国は国司に順ひ、荘は領家のままなりけり。上下安堵して覚えしほどに」という一文をもって始めていることに、巻十一までで平家の滅亡を語り終わり、巻十二をそれ以後のこととして扱おうとする意図を読み取ることが許されるだろう。たとえば富倉徳次郎氏はそのところを「巻十一で平家の滅亡を語り終わり、改めて平家の絶滅を書く巻として巻十二が用意され」というふう^①に説かれ、巻十二の構想に言及されている。巻十二についてのそのような理解は、平家の生き残りの人々の末路がこの巻で多く取り上げられていること、それに六代の処刑の記事を記した後、「それよりしてこそ平家の子孫は永く絶えにけれ」という一文をもってこの巻が閉じられていることの意味をそのように理解してのものであるだろう。しかし平治の乱の遠い決着を述べたような「紺撮之沙汰」あるいは頼朝と義経との対立が生んだ都を舞台にしての騒擾が巻十二のなかでかなりの分量を占めていることだけを考えてみても、巻十二の構想をそのよう

に捉えることには賛成しがたい。その点では、簡単にではあるが「大地震」の果たす役割に言及した今井正之助氏の次のような理解が当を得ている。氏は「この地震を引き起こしたとされる平家の怨霊はこの後、直接には、平氏を滅ぼした義経に祟るのであるが（「判官都落」）、「土佐房被斬」、平氏子孫狩り（「六代」）、平氏残党討滅（「六代被斬」）など、再び都が騒擾の地と化すことの象徴として、本章段は巻十二全体の序章たりえている」と指摘する。もっとも、本稿の当面の課題を考える際にはこれだけでは不十分で、この章段を理解するには次の側面についての考察が必須のものとなる。巻十二において騒擾が単にそれとして叙述されているにすぎないのか、それともならかの歴史的な認識をもってそれが書かれているのかという、いわば巻十二の統合的な視点についての考察である。

(三)

大地震は、「方丈記」にも鴨長明がその生涯で経験した五つの不思議のひとつとして、その惨状を記していることからよく知られているもので、覚一本がその文章を利用していることも周知のことである。また、この章段を取り上げる際に常に引き合いに出される史料だが、たとえば「玉葉」元暦二年七月二十七日の記事には「依天下政違乱、天神地祇成怨有此地震」とあって、それを政治の乱れと国家の動乱を怒った神々の仕業とし、また「愚管抄」には「事モナノメナラズ、龍王動トゾ申シ。平相国龍ニナリテ、フリタルト世ニハ申キ」とあって、それを清盛の霊の仕業としている。そして覚一本では、その背後に平家の怨霊の働きを見ている。元暦二年八月

十四日に文治と改元されるが、「玉葉」には改元の理由を大地震に よると記している。文治という年号は寿永三年四月十六日の改元の 際にも新しい年号の候補に上がったが退けられて元暦が採用された。大地震をきっかけとしたこの度の改元においては、「此五、六年干 戈競起、都鄙不静。以文治世歟。為至要。仍殊被撰用者也」と、その 採沢の理由が記されている。対平家の内乱に終止符を打ち、後白 河院を中心とした文治政治の復活を期待しての元号であったわけだ。 改元の文議に加わった藤原雅長は「文ノ字不可被棄」の由を頻りに 主張したと伝えている。文治という文字には偃武の強い願いが籠め られていたのである。平家の滅亡は期待と不安をふたつながらに生 じさせたに違いない。そして大地震は、平家の滅亡が平和の到来を 実現するものではなくて、次なる動乱の幕開きとなることを畏怖す る人々の思いのほうを掻き立てるものとなったのだらう。「平家物 語」の背後には撰関家の王法思想があるように思われるのだが、覚 一本では平家の滅亡によって、いったんは「国は国司に順ひ、荘は 領家のままなりけり」といった、律令制度と荘園とが共存する撰関 ないし院政初期の時代の復活が平和の姿として期待されたとする。 そして大地震はその期待の念を無残に打ち砕く前表とされている。 養和以外の改元の記事を載せない覚一本は文治の改元にも言及し てはいない。安元から治承への、養和から寿永への、寿永から元暦 へのそして元暦から文治への改元の時期の出来事は、松尾葦江氏の 言われる「歴史的現在の時間の流れ」の中の、いわば物語りの時間 の中でこのことに属し、改元への言及は必須のことではなかったらし い。ご破算願望と予祝の意味をこめて時間に始めと終わりの区切り 目を付けるところの元号的発想は覚一本の世界では意識の外にある。

むしろそこで扱われている出来事は、作品内部の時間の中にあつても、またそれに接続する現実の時間——あとでそれに言及するが——との関わりにおいても、均質な時間の流れの中で連続するものであることが意識されているように思われる。通覧すればただちに気が付くように、巻二―巻十一にいたる諸巻はそれぞれが治承元年後半期から元暦二年前半期（養和二年だけは別として）の八年間の出来事を、一巻で一年、一巻で二年あるいは二巻で一年の割で叙述している。巻一と巻十二（巻六の末尾と巻七の冒頭の養和二年の一年分と翌年の寿永元年の初めはやや整合性を欠いている）だけが、治承元年前半のことを記す巻一はその前半の三分の二、そして元暦二年後半のことを記す巻十二はその後半の三分の一に、それぞれそれ以前と以後の十余年ないし三十余年の間の出来事が叙述されており、その変化の箇所構成上のひとつの区切りを認めることが出来る。

巻十二について、そこで扱われている時間に注目してその在り方を見ると、そこにはふたつの性質の叙述が接合されていることに気が付く。「大地震」から「泊瀬六代」の初めで叙述が一段落する六代の赦免（古典大系本でいうと下巻の四〇五頁の一三行目）までの出来事は元暦二年七月から元暦二年一二月にかけてのことであり、元暦二年正月から六月までの出来事が記されている巻十一と均質な叙述となっている。巻一では「鹿谷」の初め（古典大系本でいうと上巻の一―二頁の四行目）のところで治承元年正月の出来事が始まるのだが、そこから巻十二の件の箇所までが、先に言及した年立てと巻立てとの仕方において、時間の流れの上で均質な叙述がなされている。巻十二のその部分に記される出来事は、ある意味では雑多

であり相互の連続性を欠いている。それに、たとえ義経の話題を見ると、その顛末が記されているわけではなくて、端緒が記されるばかりの、後の展開に対しては興味を開いただけのかたちになっている。その結末までが叙述の対象になっているのは六代のことだけである。

六代の救済の顛末が長谷寺観音の利益譚として結ばれたその後からはじまる叙述は、頼朝による源行家と義憲の討滅の顛末であり、義経討滅の記事と意味の上での共通性を持っている。その発端は元暦二年十二月の六代的一件と時を交錯して始まっているが、それに接続する「六代被斬」の始めがその数年後のこととして記されているために、事件そのものの時期は曖昧になっている。そのあたりから時間の経過の間隔も大きくなって時間の躰化が図られており、巻十二の末尾に記される六代の処刑——それも時期を記されない——の時まで無慮十余年の時の流れが早足で迎られるのである。

巻十二の後半三分の一にあたるその部分については後に論じるとして、ここで確認しておきたいのはそれ以前の部分の示すところの叙述の姿勢についてである。先に言及したこの作品の主題部においては、鹿谷の事件に端を発して平家が滅亡するまでの経過を叙述するという大枠は持っている。しかしそこに流れる時間にはかたちの上では始まりも終わりも付けようとしておらず、出来事の上に完結性を認めることをしていないことに留意するべきである。この作品のかたちは、長い歴史の中から八年の間の時間を切り取って、その間の出来事を平家の滅亡に焦点を当てて叙述した、そのように捉えるのもっとも自然である。ことに平家の滅亡をもって終わらずに、一見、雑多とも見える元暦二年の残り半年間の出来事をそれま

での巻々と時間の流れにおいて均質なかたちで叙述する巻十二前三分の二の記事の存在は、そうした基本的な姿勢を示すものと言えるだろう。説話的な発想、あるいは物語り的な虚構や叙述はそうした骨組みの中で生かされているのであって、「平家物語」の文学としての在り方を論じる際には、それが編年体を取っていることの意味がもっと重視されて然るべきなのである。「大地震」の章段の構想上の、あるいは構成上の意味もそうした基本的な認識との関わりにおいて解釈することが必要だろう。

四

「大地震」の洛中洛外における被害の列挙の中に得長寿院の三十三間の御堂の倒壊のことが挙げられる。「吉記」などの記事からそれが事実であったことは知られるのだが、ここでこの御堂にわざわざ言及するのは、巻一の「殿上圍討」との響きあいを意図してのことなのだろう。忠盛の得長寿院と清盛の蓮花王院とは平家の院への奉仕と協力関係の、そして平家の栄華を嘉するモニュメントとなるものであった。ことに得長寿院はこの作品において平家の栄華の道への踏み台となったものとして、特別な意味を与えられた建物である。「大地震」はこの作品の始まりの部分と呼応するかたちで、その建物の崩壊をもって平家の壊滅を印象づけているように思える。この一文をそこまで読むのは、深読みに過ぎるだろうか。その点を判断する際に、覚一本が大事な節目においては作品の内部での呼応関係を図っていることに留意する必要がある。多くを掲げる余裕はないので一例のみを示してみると、たとえば巻一の「吾身栄華」では「文選」の「蕪城賦」の一節をうまく取り込んで、平家の栄華の

さまを述べている。ところが巻七の平家の都落ちを語る一連の章段の中でも、事柄の上で中心となるところの「聖主臨幸」の叙述には「蕪城賦」の別の一節が利用されているといった具合である。

呼応関係はそうした記事ないし表現の上において図られているだけであろうか。構成の、あるいは構造のレベルにおいてもまた作品を統合するかたちでの呼応関係が意図されているのではあるまいか。治承元年正月の出来事に端を発して俊寛の死で終わる鹿谷の願末が、鹿谷のプロットとも名付け得る物語り的なプロットを結構するかたちで叙述されていることを、かつて論じたことがある。その折りにその鹿谷のプロットが作品全体と相似形をなすものであることに言及した。そしてまた「源平盛衰記」はそうした構造を表現の上でより鮮明にしたテキストとなっていることも前に論じたことがある。それに近いことは、延慶本においても、小林美和氏によって延慶本の巻二に小「平家」の構造を見ることができると論じられている。

この作品の主題部の最初に配された一連の事件からなるところの鹿谷のプロットでは、神々の怒りを買った不信の男藤原成親とそれに繋がる人々の悲劇が語られる。その事件は成親達にとっては、まさに悲劇であったが、それはその対立において勝利者ないし加害者となった平家にとっても滅亡への第一歩となるものとされているのである。そのことを予告するのが、「かやうに思嘆きのつもりぬる平家の末こそおそろしけれ」としてそのプロットが閉じられた直後に配された「辻風」の章段であった。それは成親達の無残な最期を印象付けると同時に、近い将来における重盛の薨去と動乱の世の出現、そして平家の滅亡を予告する前表としての役割を負わされて、

そこに配されていた。「大地震」の章段はそれと関連付けて理解することができるのではないか。つまりそれは構成と意味の上で、「辻風」の章段に相当するものとして、巻十一で語り終えられた平家の滅亡を象徴し、かつそれがより大きな動乱への一步であるということを示す前表として巻十二の巻頭に配されていると考えるのである。

(四)

平家の滅亡によってもたらされるべき平和として期待されているのは、先にも触れたとおり「国は国司に順ひ、荘は領家のまま」という古い秩序によるものであった。それに対して大地震は、期待が空しいものに終わることを予告するわけだが、それが裏切られてゆくのはどのようなかたちにおいてなのだろうか。目前の現象としては、先にも引用した今井氏の指摘にあるような都とその周辺を舞台にした騒擾として表現されている。しかしそれらの章段は単にそうした現象面のみを見せるものとして取り上げられたものなのだろうか。わたしは、そこに二つの性質の叙述の存在を見る。一つは、いうまでもなく平家一門の末路を示すものであり、それは六代の身上に収斂されている。そしていま一つは歴史的な状況の展開を見せるもので、それが頼朝の影を濃く投影したものと述べられてある。後者は第二節の末尾に示した大事な問題に関わることで、ここで具体的に示しておく必要があるだろう。

巻十二「大地震」の直後の章段である「紺撮之沙汰」は平治の乱との因縁において頼朝の果報が語られるものである。「土佐房被斬」「判官都落」は義経がクローズ・アップされているが、「泊

瀬六代」の中の行家、義憲などの記事の存在を考え合わせると、それが鎌倉で為政者たらんとする頼朝の非情で暴力的な側面を示すものともなっていることに気が付く。また「吉田大納言の沙汰」は頼朝の全国規模の政経上の最大の政略となった守護地頭の設置と対朝廷政策に大事な役割を果たした「関東申し次ぎ」の設置を語るものなのである。そのようにこれらの章段は頼朝の動きを直接、間接に示すものであり、新たな政治の拠点と築こうとする政治家頼朝のやや強引な姿がそこに写し込まれている。頼朝に対するそうした捉え方は、たとえ彼に対する呼称の上にも現われている。巻十一の「鏡」の中で頼朝が従二位に叙されたことが記されるが、覚一本ではそれ以後、彼は地の文においては一貫して鎌倉殿と呼ばれている。因みに屋代本では源二位としている。ひとつの政治権力の所在地としての鎌倉とそこを支配する頼朝の存在を強調する姿勢をそこに見ることが出来る。巻十二の叙上の章段は一見、雑多な記事の編年的な集成に見えて、実はそうした一貫した意味を付与されたものとなっているのではなからうか。そのように見てくると、「大地震」は単に都の騒擾の発生を予告する前表としての意味のみを担うものではなくて、作品において叙述の対象となっている時間をはるかに越えた後の時期までを念頭に、歴史的な展開をも暗に響かせるかたちでの前表としての意味を与えられて、巻十二の巻頭に配されていることが分かる。そしてその意味は、頼朝の動きを述べた叙上の章段の中に将来の展開を生み出すことになる具体相を通して暗示されているのである。

その中でことに重要なのは、「吉田大納言の沙汰」である。この章段はこれまでの研究のなかではその後半に記される吉田経房を

「平家物語」の作者についての伝承との絡みで取り上げ、しかもその処世術への批判を読み取ることに重心を置いた扱いをされてきた。そして守護地頭の設置の記事については作品内部での意味を検討されぬまま、直接それを作品批判に繋げるのみであった。しかし先に言及したように、これらはいずれも王法の力を削ぐことになる頼朝の政略を記したものであり、以後の歴史の展開を暗示する意味を付与されてそこに取り上げられているように理解できる。

およそ覚一本の叙述は人間への興味と様式的な表現、そして説明を後退させた「見せる」文章が伸長したテクニクとなつてはいるが、同時に、歴史に関わる出来事に関してはその歴史的側面への巨視的な認識を背後に持った叙述面での配慮がなされ、歴史を語ろうとする姿勢が強いことにも留意しておかねばならない。巻十二の中で文覚の動きにスポットが当てられているのは、頼朝の挙兵に始まる筋をなすもので、そこに人間的な側面、言ってみれば説話的な発想を持ちこんだ歴史叙述のかたちを見ることが出来る。しかしその一方で巨視的に政治経済の側面から歴史を捉えた記事ないし叙述が重ねられているのである。「国は国司に順ひ、荘は領家のまま」の状態に復することへの期待が語られるのはそのレベルでのことであり、元暦二年後半の出来事を語る巻十二の内容はその期待が裏切られてゆく様相を記すのである。そこでは、たとえば延慶本に見られるような、為政者として頼朝を寿祝する姿勢といったものは稀薄である。むしろ、頼朝の政略は王法の衰微に向けて拍車をかけたという否定的側面で捉えられているのであって、ことに守護地頭の設置の記事はその点で大きな意味を担って記されていると解釈し得る。当初どの程度にその意味の重大さを理解していたかは分からないが、たと

えば「玉葉」にも守護地頭に関わる記事は書かれていて（文治元年十一月二十八日、二十九日）、その年の十二月二十日にまたも振った地震を記したところには、「此震非他武士諸国押領之徴歟」などと記されている。後になると、それが王法を侵害する結果を生んでいったというはつきりとした認識が生じている。たとえば「増鏡」第二の「新島もり」の一節には「諸国の総追捕使といふ事うけたまはりて、地頭職に我が家のつはものどもをなし集めける。この日本国の衰ふるはじめは、これよりなるべし」と記している。そして守護地頭が国司および領家と対立する存在であることを記すのは「承久記」である。なかでも元和四年古活字本は「同年（承久の乱の年）夏の比より、王法尽きさせ給ひて、民の世となる。故を如何にと尋れば、地頭・領家の相論とぞ承はる」として、守護地頭の設置が承久の乱の遠因をなしたとしている。承久の乱への言及は覚一本では文覚の怨霊の働きを後鳥羽院の隠岐島配流の原因であるとして、頼朝挙兵以来の文覚の物語りの筋に連なるものとなっている。それ故重心はもちろん文覚の最期を示すことにあるのだが、巻十二の結びに近いところで承久の乱が触れられていることは注目しなければならぬ。直接的な説明文によって繋がれてはいないが、平家の滅亡、国司と領家による支配の体制の回復への期待、大地震、守護地頭の設置、承久の乱といった出来事への言及は、この平家の滅亡の物語りが承久の乱に至る動乱の時代への階梯としてあるという認識の表明と見てよいのではないか。

その点に関連して注目しなければならないのは覚一本の次のような構成である。先にも触れたように、巻一の「鹿谷」の初め近く（古典大系本でいうと上巻の二二頁四行目）から巻十二の「泊瀬

六代」の初め近く(古典大系本でいうと下巻の四〇六頁一三行目ないし四〇七頁最終行)までは治承元年(一一七七)正月から元暦二年(一一八五)十二月までの、ただし養和元年後半と養和二年の出来事はほとんど叙述の対象から外されているので、八年間のことが語られている。そこには繁閑の差はあるものの、出来事は月日を追って密度濃く取り上げられていて、その点で均質性を認めること出来る文章となっている。ところが巻一のそれより前の部分と巻十二のそれより後の部分はあきらかにその八年間のことを語るところとは時間の上での密度に大きな差がある。巻一のその部分は、序の役割を帯びた文章と導入的な役割を帯びた文章とからなっていると考えられる。序にあたる文章については覚一本に限っての考察ではないけれども、以前に考えたことがあるのでそれを参照されたい。

導入部については、いまそれを詳論する余裕はないが、「二代后」の初め近く(古典大系本でいうと上巻の一〇七頁一五行目)から始まると思われるが、その文章は鹿谷事件によって後白河院と清盛のあいだに表立った衝突が起こる以前に水面下において両者の対立が深まっていたことを語るものであるとわたしは考えている。それは永暦・応保のころの二条天皇と後白河院との対立から叙述をはじめのだが、その端緒を「鳥羽院御晏駕の後は、兵革うちつづき」として保元と平治の乱に認める文章をもって始めている。単に言及がなされているにすぎないのだが、この作品が語ろうとする八年間の出来事の遠い始まりが保元と平治の乱にあることを、そうしたかたちで示そうとしたもののように思われる。巻十二においては、出来事としては翌年の正月にまたがることになるが、六代の救済の実現をもって元暦二年の叙述が終わり、その出来事と交錯するかたちで

元暦二年十二月に端を発する源行家と義憲の追討のこと(古典大系本でいうと下巻の四〇八頁一行目から)が語られる。その叙述からは月日を追って出来事を示すという姿勢は稀薄になり、時間を疎にして大きなレインジで歴史を辿る文章となっている。巻十二の末尾に至るその文章はそうした点で、巻一の先に言及した文章と性質において類似しており、構成の上からはこの作品の本体ともいふべき八年間の年代記を挟んでそれと呼応している。その文章の中に、承久の乱への言及が見られるわけで、保元・平治の乱からの展開が始めに示されたのと同じように、承久の乱への展開がそこに暗示されているように思われる。歴史のレインジを大きく取ったそれらの文章は平家の滅亡を語る八年間の出来事が保元・平治の乱に遠い始まりを持ち、承久の乱に遠く繋がってゆくものであることを示すものとして、その本体部分の前と後とに配されていると理解するのである。

そのような歴史的な認識を背景にはいるものの、本体部分をなす八年間の叙述は始まりと終わりををもって自己完結したものと見做されていない。編年体をもって叙述され、しかも治承に始まる年代記を閉じるのに平家の滅亡の時点をもってせずにその滅亡の年の終わりのところにそれを設定していることの上に、そうした基本的な姿勢を見ることが出来る。作品の終わった後にも、次元こそ違えそれに連続する出来事は現実の時間の中で続いていく。その意味で、元暦二年記をもって中断された世界は、そこからは次元を変えて言葉の世界から現実の時間に向けて流れだしているとされているのであり、「大地震」はそうしたレインジを持った前表としての意味をも担っているように思われる。

始まりと終わりをそのようなかたちで作品の外の現実の歴史的な出来事に委ねながら、もう一方では作品に物語りとしての完結性を付与するところの筋が幾重にも張り巡らされている。「六代被斬」はそうした役割を帯びた章段であり、作品の始まりの箇所に呼応するかたちの閉じ目がそこに仕込まれている。平家の残党と生き残りの一門の最期がそこに集約的に記されており、その話題の中心として六代の最期が取り上げられる。そして六代の処刑の記事を「それよりしてこそ平家の子孫はながくたえにけれ」と結んで巻十二は終わる。そうした内容と表現は、しばしば論じられるように、この作品の上に清盛によって興亡を見た平氏の家の物語りというかたちを整えようとする作品形成の意図に由来するだろうことは直ちに想像出来る。

家の物語りとしては、ひとつには巻一の冒頭において桓武天皇に出で清盛に至るものとして開かれた系譜が六代の処刑による断絶をもって閉じられるというかたちで完結性が与えられている。そしてまたそれとは違った呼応関係が作品の始めと終わりの間に仕込まれていて、家の物語りとしていまひとつの性格が与えられているように思われる。さきにも触れたように、この作品の本体部ないし主題部は治承元年正月の出来事に始まり、それに端を発する一連の事件の顛末が、鹿谷のプロットとでも名付け得るプロットによって統合された物語りを成しており、それがこの作品のいわば第一幕を形成している。「六代被斬」で結ばれる六代の物語りはそれに呼応することによって家の物語りに血の因縁の物語りとしての意味を付与さ

れているのではないだろうか。

六代の物語りは、その父の平維盛についての叙述とひとつながりの脈絡を成し得る。覚一本のなかで維盛の物語りと六代の物語りがひとつの筋をなしているとする解釈はたとえば「六代御前物語」の存在が傍証となる。六代の物語りはそれよりもさらに系譜をさかのぼるかたちの筋の上にあるように思われる。「平家物語」には、平家一門を構成する三つの家である小松家、本宗家、池殿の内部対立、ことに小松家と本宗家との対立への目配りがなされている。源平の合戦においては、宗盛を中心とする本宗家、そして宗盛と同腹の兄弟が主導権を握って戦い、維盛は戦線離脱をして自殺するのであって小松家の影は薄い。しかし作者は小松家に心情的に加担して、維盛の動静をクローズ・アップで迎える。そうした筆遣いの背後には、ひとつには「平家公達草紙」あるいは「安元御賀記」などによって知られる、平家全盛時代の宮廷での華やかな存在であった維盛への懐古の情とその最期を悼む気持ちがあるのかもしれない。しかし維盛の父重盛の描き方をも視野にいれるならば、より大きな理由は、この作品に家の物語りとしての性格を与えようとする作品形成の意図の上に求められる。重盛を称揚する筆遣いは、実際の重盛に対する評価を反映する面を持っていると思われるが、同時に小松家と本宗家を対照的に描き、しかも小松家に重心を置いて平家の運命を捉えようとする作者の姿勢から出たものだろう。六代の物語りはそうした作品の在り方との繋がりの上で、その意味と役割を理解すべきものである。

鹿谷の謀議に発する悲劇は、藤原成親の深い欲望と平家に対する憎悪の念によって引き起こされたものであるとする物語り的なプロ

ットを付与されて叙述されている。成親の平家に対する敵対心は平治の乱の折りにもすでに行動となって現われた。この度のクローデータの計画は背後に後白河院の意志が働いているが、この作品は成親を首謀者としてクローズ・アップする。そして平治の乱の折りも、そしてこの度も敗者として捕えられた成親を保護しようと振舞うのが重盛である。成親の家と平家一門との、なかんずく重盛の家との間に二組みの婚姻による親戚関係が結ばれていたことに、重盛のそうした苦しい態度の原因があるのだろう。成親の態度はいわば屈折した心理を奥に秘めた近親憎悪であり、深い因縁が絡んでいた。維盛の愛妻は成親の娘であり、六代はその間に生まれた息子である。六代はすなわち清盛の曾孫で、しかも成親の孫にあたるわけで、二つの家に悲惨な運命をもたらすことになる悲劇の対立をなした二人の血を受けた因縁の子なのである。作品の主題部の最初に配された鹿谷の事件の顛末と小松家の人々の物語り、そして巻十二の最後に記された六代の物語りは互いに呼応しつつ、家の物語りの上に血の因縁の物語りという筋書きを与えるものとなっている。物語りの幕開きをなす神々の怒りを買った成親と清盛の対立は二人の人物の血を受けた六代の処刑という結果を生んで血の因縁の物語りとしての幕を閉じる。六代の最期を語る物語りを最後に配した寛一本の構成はそうした説話のないし物語りのな構想をも投影したもののようになっている。

平家の滅亡という歴史的な事件を再現するのに、寛一本の作者はすべてを呑み込んで流れて行く時間の連続的な側面への認識のもとに平家の滅亡を語ろうとする歴史的な構想、そして血の因縁が絡む家の悲劇という説話的かつ物語りのな構想をふたつながらに生かす

方途を構成の上に模索していたのではないだろうか。巻十二の上にそうしたことを読み取ることが出来るように思っているのである。前者は「平家勸文録」にいう四部の合戦状の第三番の闘争の書に通じる歴史語りのかたちとの関連を考えさせる在り方のように思える。保元の乱から承久の乱までをひとつつながらの事件として見る歴史認識に注目する必要があるだろう。そして後者は色好みの物語りが家の物語りでもある作りの物語りの伝統との関連においてそれを捉えたとよいかもしれない。問題は大きい。構成の問題はまさにこの作品の文学としての在り方の特質そのものを探る問題なのである。

△注▽

- ① 『平家物語全注釈』下巻(二)〔角川書店 昭和43年8月刊〕の34頁。
- ② 『平家物語必携』(別冊国文学No.15 学燈社 昭和57年8月)の137頁。
- ③ 後世のたとえば『皇年代記』なども同じ。
- ④ 『改元部類』による。
- ⑤ 同右。
- ⑥ 同右。
- ⑦ 拙著『中世伝承文学の諸相』(和泉書院 昭和63年8月刊)の169—184頁。
- ⑧ 『平家物語論究』(明治書院 昭和60年3月刊)の56—73頁。
- ⑨ 『平家物語の構成—鹿谷のフットー』(『文学』昭和63年3月号)注⑨の185—205頁。
- ⑩ 『平家物語生成論』(三弥井書店 昭和61年3月刊)の161—178頁。
- ⑪ 『平家物語序章考』(『南山国文論集』第10号 昭和61年3月)
- ⑫ 村井康彦『平家物語の世界』(徳間書店 昭和48年4月刊)の116頁。
- ⑬ 上橋手雅敏『平家物語の虚構と真実上』(塙新書 昭和60年11月刊)の75—115頁。
- ⑭ 安田元久『平家の群像』(塙新書 昭和42年6月刊)の72—85頁。
- ⑮ 注⑨参照。